



CHAPTER 7

Cisco Prime LAN Management Solution 4.1 へのデータの移行

この章では、データを LMS 4.1 に移行する方法について説明します。内容は、次のとおりです。

- [LMS 4.1 への移行の概要](#)
- [データ移行の範囲](#)
- [LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、または LMS 4.0.1 からのデータの移行](#)
- [アップグレード後の操作に関する注意事項](#)

LMS 4.1 への移行の概要

移行とは、データを古いバージョンの LMS から新しいバージョンの LMS へと移動させるプロセスをいいます。

移行には、次の作業が含まれます。

1. 古いバージョンの LMS のデータのバックアップ。
2. 新しいバージョンの LMS のインストール。
3. バックアップしたデータの復元。

LMS 4.1 を新しくインストールしてから、リモートのデータ移行を実行する必要があります。LMS 4.1 は、LMS 4.0/4.0.1 以外の以前のバージョンからの直接アップグレードはサポートしていません。

LMS 4.1 へのデータ移行は、次の方法を使用して実行できます。

- 通常バックアップ：すべての設定ファイルおよび収集されたデータをアプリケーション データベースからバックアップするプロセス
- 選択バックアップ：必要なシステム設定およびデータだけをバックアップするプロセス



(注)

Solaris マシンでは、バックアップ フォルダを圧縮して転送する必要があります。そうしなかった場合、ファイル名が大文字から小文字に変更されるため、ファイル名とチェックサムの変化によって復元に失敗します。



(注)

バックアップデータをリモートの Solaris サーバからコピーする際には、データをバイナリモードで転送してください。FTP クライアントソフトウェアを使用する場合は、デフォルトの転送モードがバイナリに設定されていることを確認してください。

バックアップデータを ASCII モードまたは自動（オート）モードで転送すると、データ移行が正常に行われません。

リモート移行する際の注意事項

LMS 3.x からデータをバックアップし、LMS 4.1 にデータを復元すると、アプリケーションデータが一致していないことを示す警告メッセージが表示されます。このメッセージは無視して、データの復元を続行してかまいません。

データ移行の範囲

ここでは、LMS 4.1 にアップグレードした場合に、Common Services、Network Topology、Layer 2 Services および User Tracking、Inventory、Configuration および Image Management、Fault Management、IPSLA Performance Management、CiscoView、Device Performance Management、および Portal について、移行されるデータを示します。

- すべてのプラットフォームで、異なる *NMSROOT* ディレクトリ間での移行がサポートされています (*NMSROOT* は、LMS のインストールディレクトリ)。デフォルトでは次のようになっています。
 - /opt/CSCOpX (Solaris および Soft Appliance の場合)
 - C:\Program Files\CSCOpX (Windows の場合。C: はシステムドライブ)
- Solaris から Soft Appliance へのプラットフォーム間のデータ移行は、次の LMS バージョンでサポートされています。
 - LMS 3.2 SP1
 - LMS 4.0
 - LMS 4.0.1
 - LMS 4.1

これらのバージョンから LMS Soft Appliance サーバにデータを復元する場合は、通常バックアップまたは選択バックアップを選択できます。すべての前提条件が満たされていることを確認してください。詳細については、「前提条件」を参照してください。

ここでは、次の内容について説明します。

- [Common Services のデータ移行の範囲](#)
- [Network Topology、Layer 2 Services および User Tracking のデータ移行の範囲](#)
- [インベントリ、Config およびイメージ管理のデータ移行の範囲](#)
- [障害管理のデータ移行の範囲](#)
- [IPSLA Performance Management のデータ移行の範囲](#)
- [CiscoView のデータ移行の範囲](#)
- [Device Performance Management のデータ移行の範囲](#)
- [ポータルのデータの移行範囲](#)

LMS 4.1 へのデータ移行は、次の方法を使用して実行できます。

- 通常バックアップ：すべての設定ファイルおよび収集されたデータをアプリケーション データベースからバックアップするプロセス
- 選択バックアップ：必要なシステム設定およびデータだけをバックアップするプロセス

Common Services のデータ移行の範囲

Common Services (CS) のデータは、通常モードと選択モードのいずれを使用してもバックアップできます。

通常バックアップ

次のデータが移行されます。

- LMS のユーザ情報
- シングル サインオンの設定
- Device and Credential Repository (DCR) の設定
- ピア証明書と自己署名証明書
- ピア サーバのアカウント情報
- Login Module の設定
- Software Center のマップ ファイル
- ライセンス データ
- コア クライアント レジストリ
- システム アイデンティティ アカウントの設定
- Cisco.com ユーザ設定
- プロキシユーザの設定
- ジョブおよびリソース データ、DCR データ、グループ データ、およびデータベースに格納されているその他のデータ
- 探索設定およびスケジューリングされたジョブ
- ローカル ユーザ ポリシー セットアップ
- システム プリファレンス
- マルチ デフォルト クレデンシヤル：マルチ デフォルト クレデンシヤルが移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。
- ポリシー設定：ポリシー設定が移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。
- Logrot 設定：Logrot 設定が移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。
- DCR 除外リスト：DCR 除外リストが移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。

- 到達不能なデバイスのポーリング設定：到達不能なデバイスのポーリング設定が移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。
- LDAP 設定：LDAP 設定が移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。

選択バックアップ

CLI から選択データ バックアップを実行すると、次のファイルを例外として、上記のすべてのデータがバックアップされます。

- Software Center のマップ ファイル
- すべてのアプリケーションの、1 回、即時、および完了したジョブのデータ

ライセンス上限に基づいた移行後の UDM デバイスのステート変化

UDM は、バックアップ データの PIDM テーブルから管理対象デバイスの数を取得します（個別のデバイス ID のみ）。LMS 4.1 ライセンスの数に基づいて、対応する数のデバイスが **Managed** ステートに移行され、残りのデバイスは **Suspended** ステートに移行されます。このため、コレクションはすべて、UDM 内の **Managed** デバイスに対してだけ実行されます。ただし、**Suspended** デバイスはデータの履歴が保持されます。**Suspended** デバイスに対してもコレクションを実行したい場合は、次のいずれかを行います。

- LMS 4.1 ライセンスのアップグレード
- 一部の不要なデバイスを **Managed** ステートから **Unmanaged** ステートに移行し、必要なデバイスを **Suspended** ステートから **Managed** ステートに移行します。

移行後の UDM ポリシーはデフォルトですべてのデバイスにより **Managed** として設定される

LMS 4.1 サーバを新規インストールしたサーバ上に設定済みの UDM ポリシー (**Managed By Group**) があり、一部のデバイスを以前から管理していた場合は、古いバージョンの LMS データを LMS 4.1 サーバに移行すると、移行後にバックアップ データが LMS 4.1 サーバに復元され、UDM ポリシーが **Managed By All** デバイスとして設定されます。デバイスの状態がどのようになるかの詳細については、[ライセンス上限に基づいた移行後の UDM デバイスのステート変化](#)を参照してください。

LMS 4.1 の ACS バックアップ/復元動作

LMS 3.2 または LMS 3.2 SP1 から ACS バックアップを復元するときは、認証モードがローカル CiscoWorks 許可モードに変化します。ACS からはユーザもグループも一切インポートされません。認証と許可がローカルに実行されます。

異なるアプリケーション内に同じ名前のユーザ定義グループ名があった場合（バックアップ データ）の LMS 4.1 に復元した後の動作

- 例 1：CS、CM、および RME（LMS 4.0 よりも前の LMS バージョンの一部）内に「Group1」があった場合、以前のバージョンの LMS からデータをバックアップして LMS 4.1 に復元した後は、CS の「Group1」だけが残ります。CM と RME の「Group1」は、削除されます。
- 例 2：CM および RME（以前バージョンの LMS の一部）内に「Group1」があった場合、以前のバージョンの LMS からデータをバックアップして LMS 4.1 に復元した後は、CM と RME の「Group1」は削除されます。

Network Topology、Layer 2 Services および User Tracking のデータ移行の範囲

LMS 4.1 での Network Topology、Layer 2 Services および User Tracking のデータ（以前のバージョンの LMS では CM と呼ばれていたもの）は、通常モードと選択モードのいずれを使用してもバックアップできます。

IDMMonitor.properties で使用できるアイデンティティ関連の設定は、同じバージョンのバックアップおよび復元にしか適用できません。

グループ設定の条件は、次のとおりです。

- CS と CM（以前のバージョンの LMS の一部）内に同じ名前のグループが存在した場合、復元後には CS グループしか存在しなくなります。
- CM と RME（以前のバージョンの LMS の一部）内に同じ名前のグループが存在した場合、両方のグループが破棄されます。

通常バックアップ

LMS 4.1 にアップグレードすると、次のデータが移行されます。

- SNMP 設定
- レイヤ 2 サービスに関連する設定（ユーザ追跡、VRF-lite）
- スケジュールが設定されたデータ収集の詳細
- ユーザ定義グループ
- 設定資格情報
- データ削除設定
- トラップ コンフィギュレーション設定
- カスタム レポートとレイアウト
- トポロジ マップ設定：アップグレードにのみ適用
- トポロジ レイアウト：手動アップグレードされたトポロジ レイアウトは、アップグレードおよびバックアップ/復元用に移行されます。
- MAC 検出設定
- デバイスの詳細
- ポートと VLAN の詳細
- Campus のジョブとアーカイブ
- User Tracking のジョブとアーカイブ
- VNM 設定、ジョブ、およびアーカイブ：VNM 設定、ジョブ、およびアーカイブが移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 または LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。

選択バックアップ

CLI から選択データ バックアップを実行すると、次のファイルを例外として、上記のすべてのデータがバックアップされます。

- デバイスの詳細
- ポートと VLAN の詳細
- Campus アーカイブ、UT アーカイブ、および VNM アーカイブ

インベントリ、Config およびイメージ管理のデータ移行の範囲

LMS 4.1 でのインベントリ、Config、およびイメージ管理のデータ（以前のバージョンの LMS では RME と呼ばれていたもの）は、通常モードと選択モードのいずれを使用してもバックアップできます。

通常バックアップ

次のデータが LMS 4.1 に移行されます。

- Change Audit
 - 削除設定ポリシー
 - Force Purge
 - 設定変更フィルタ
- 設定管理
 - 転送設定
 - アーカイブ設定
 - 収集設定
 - 削除設定
 - 除外コマンド
 - 取得設定
 - Config Editor
 - ジョブ設定ポリシー
 - デバイス管理
 - デバイス管理設定
 - デバイス クレデンシャル検証設定
- レポート
 - アーカイブ設定
 - PSIRT/EOS/EOL レポート
 - EnergyWise レポート
- Config アーカイブ
 - シャドウ ディレクトリ
 - ChangeAudit レコード。これには、設定変更の詳細も含まれます
 - アーカイブされた設定のバージョン
- NetConfig
 - ユーザ定義テンプレート (UDT)
 - デフォルト テンプレートの使用方法

デフォルトでは、移行時にすべてのテンプレートが管理者に割り当てられます。デバイスとタスクの間のマッピングは移行されません。

- 設定グループ
 - アーカイブ管理
 - すべてのジョブ
 - ラベル設定
 - カスタム クエリー
 - ベースライン テンプレート
 - シャドウ ディレクトリ
 - ChangeAudit レコード。これには、設定変更の詳細も含まれます。
 - アーカイブされた設定のバージョン
- Admin : 削除ポリシー
- Config Editor
 - プライベート Config
 - パブリック Config
 - Config Editor のジョブ
 - ファイルを開くときの編集モード。Raw または Processed になります。
- NetConfig :
 - Netconfig ジョブ。これには、デバイスに基づくジョブ、ポートに基づくジョブ、およびモジュールに基づくジョブが含まれます。ポートおよびモジュールに基づくジョブが移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。
 - ユーザ定義タスク
- NetShow
 - NetShow ジョブ
 - 出力アーカイブ
 - コマンドセット
- ソフトウェア管理
 - View/Edit の設定
 - アップデート アップグレード情報
 - ソフトウェア管理リポジトリのイメージ
 - ジョブ ブラウザ内のすべてのジョブ
- システム プリファレンス
 - アプリケーションのログ レベル設定
 - ジョブの削除
 - RME デバイス属性
 - RME セカンダリ クレデンシャル
 - 収集失敗通知

- インベントリ
 - インベントリ変更フィルタ
 - システム ジョブ スケジュール
 - Cisco.com の取得間隔
 - インベントリ ジョブ
 - デバイスの詳細
 - インベントリ収集ステータス
 - DCA ジョブ
 - デバイス管理ステート
 - ユーザ定義グループ
- Syslog の詳細
 - バックアップ設定ポリシー
 - 削除設定ポリシー
 - Force Purge
 - 自動化されているアクション
 - メッセージフィルタ
 - カスタム レポート
 - 過去 14 日間の Syslog メッセージ
 - レポートのジョブとアーカイブ
- ポートとモジュール グループの管理：ポートとモジュール グループの管理が移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。
 - ポート グループ
 - モジュール グループ
- テンプレート センター
 - テンプレート センターのジョブ
- WorkCenters
 - EnergyWise のジョブ
 - アイデンティティのジョブ
 - ASP のジョブ
 - SI のジョブ
 - SI プロファイル
 - SI 設定

選択バックアップ

CLI から選択データ バックアップを実行すると、次のファイルを例外として、上記のすべてのデータがバックアップされます。

- SWIM イメージ
- Common Reporting Infrastructure のアーカイブ
- Config Editor のデータ
- Syslog データ
- Energywise レポートのアーカイブ
- SmartInstall のアーカイブ
- アイデンティティ レポートのアーカイブ

障害管理のデータ移行の範囲

LMS 4.1 での障害管理（以前のバージョンの LMS では DFM と呼ばれていたもの）は、通常モードと選択モードのいずれを使用してもバックアップできます。

通常バックアップ

LMS 4.1 にアップグレードすると、次のデータが移行されます。

- デバイス リスト

移行手順で、LMS の Device and Credentials Repository (DCR) にデバイスが追加されます。

LMS 4.1 の DCR からのデバイスを自動的に管理するには、Unified Device Manager (UDM) のデバイス管理ポリシー ([Inventory] > [Device Administration] > [Device Allocation Policy] を選択) を設定するか、またはデバイスを手動で追加します ([Inventory] > [Device Administration] > [Add as Managed Devices])。

- 次の通知情報
 - メール通知情報
 - メールの受信者情報
 - メール送信者 ID
 - Syslog 通知
 - SMTP アドレス
 - トラップ転送アドレス
 - トラップ通知のアドレスとポート
- 障害グループ
- 一部のポーリング設定およびしきい値設定
- デバイスの詳細
- トラップ転送設定
- 通知設定（グループ、電子メール、トラップ、および syslog の設定）
- 通知のカスタマイズ変更
- イベントセット
- ユーザ定義のカスタマイズ可能なグループ

- JRM ジョブ
- イベントの詳細
- 障害履歴の詳細
- SNMP 設定: SNMP 設定が移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。
- 電子メールの件名のカスタマイズ設定: 電子メールの件名のカスタマイズ設定が移行されるのは、Windows および Solaris でデータを LMS 3.2/3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1 から復元した場合だけです。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。

選択バックアップ

CLI から選択データ バックアップを実行すると、次のファイルを例外として、上記のすべてのデータがバックアップされます。

- イベントの詳細
- 障害履歴の詳細

IPSLA Performance Management のデータ移行の範囲

LMS 4.1 での IPSLA Performance Management (以前のバージョンの LMS では IPM と呼ばれていたもの) は、通常モードと選択モードのいずれを使用してもバックアップできます。

通常バックアップ

LMS 4.1 にアップグレードすると、次のデータが移行されます。

- IPSLA データベース: ソース デバイス、ターゲット デバイス、操作、コレクタ、および収集されたデータの統計情報に関する情報が格納されています。
- ipm.env、ipm.properties、および base.properties ファイル内の設定
- 履歴およびカスタム レポート

同じバージョンのバックアップ/復元では、次のディレクトリから `/NMSROOT/bin/restorebackup.pl` スクリプトは実行しないでください。

- Solaris

```
NMSROOT/MDC/tomcat/webapps/ipm/system_reports
/var/adm/CSCOpX/files/ipm/ および
/opt/CSCOpX/MDC/tomcat/webapps/ipm/archive_charts
```

- Windows

```
NMSROOT\MDC\tomcat\webapps\ipm\system_reports
NMSROOT\CSCOpX\files\ipm\ および
NMSROOT\CSCOpX\MDC\tomcat\webapps\ipm\archive_charts
```

LMS 3.0 または LMS3.0 2007 年 12 月更新版または LMS 3.1 から LMS 4.0 に移行してから、LMS 4.1 をインストールすると、次のデータが移行されます。

- IPSLA データベース: ソース デバイス、ターゲット デバイス、操作、コレクタ、管理設定、および収集されたデータの統計情報に関する情報が格納されています。
- IPSLA プロパティの設定

- ログの設定
- システム レポート
- レポートのジョブとアーカイブ
- エクスポートされたデータ (統計情報とコレクタ)

選択バックアップ

- CLI からデータ選択バックアップを実行すると、データベースから取得可能な統計情報テーブルを除いて、上記のすべてのデータがバックアップされます。

CiscoView のデータ移行の範囲

CiscoView (CV) のデータは、通常モードを使用してバックアップできます。LMS 4.1 にアップグレードすると、ユーザのデバイス設定が移行されます。LMS 4.1 では、[Inventory] > [Tools] > [CiscoView] で CiscoView を使用できます。

Device Performance Management のデータ移行の範囲

LMS 4.1 での Device Performance Management (以前のバージョンの LMS では HUM と呼ばれていたもの) は、通常モードと選択モードのいずれを使用してもバックアップできます。LMS 4.1 で LMS 3.x (HUM) バックアップを復元すると、次のデータが移行されます。

通常バックアップ

- ポーラーの設定およびポーリングされたデータ (要約データ)
- テンプレートの設定および新しくロードされた MIB
- しきい値の設定およびしきい値違反データ
- TrendWatch の設定および TrendWatch 違反データ：これは、Windows および Solaris に LMS 3.2/3.2 SP1/4.0/4.0.1 バックアップを復元した場合にだけ該当します。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです。
- ジョブ情報/レポート (システム定義およびユーザ定義)
 - 一時停止されたジョブ インスタンスは、スケジュールが設定された状態に移行します。
- Admin の設定
 - データ削除、ジョブ削除、およびポーリングの設定 (SNMP 再試行/タイムアウト、失敗の頻度/通知の詳細)
 - トラップ レシーバグループと Syslog レシーバグループ (これは、Windows および Solaris に LMS 3.2/3.2 SP1/4.0/4.0.1 バックアップを復元した場合にだけ該当します。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです)。

選択バックアップ

- ポーラーの設定のみ。ポーリングされたデータ (要約データ) は移行されません。
- テンプレートの設定および新しくロードされた MIB
- しきい値の設定のみ。しきい値違反データは移行されません。
- TrendWatch の設定のみ。TrendWatch 違反データは移行されません。これは、LMS 3.2/3.2 SP1/4.0/4.0.1 バックアップを復元した場合にだけ該当します。

- ジョブ情報/レポート（システム定義およびユーザ定義）
 - 定期的なレポート ジョブは移行されます。一時停止されたジョブ インスタンスは、スケジュールが設定された状態に移行します。
 - 完了したレポート ジョブと即時レポート ジョブは移行されません。
- Admin の設定
 - データ削除、ジョブ削除、およびポーリングの設定（SNMP 再試行/タイムアウト、失敗の頻度/通知の詳細）
 - トラップ レシーバ グループと Syslog レシーバ グループ（これは、Windows および Solaris に LMS 3.2/3.2 SP1/4.0/4.0.1 バックアップを復元した場合にだけ該当します。Soft Appliance の場合、移行されるのはデータを LMS 3.2 SP1 および LMS 4.0/4.0.1/4.1 から復元した場合だけです）。

ポータルデータの移行範囲

LMS Portal のデータは、通常モードを使用してバックアップできます。LMS ポータルの設定は、LMS 4.1 にリモート アップグレードした場合に移行されます。以前のバージョンの LMS (3.x) でのプライベート ページのカスタマイズはすべて、リモート アップグレード後に移行されます。

LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、またはLMS 4.0.1 からのデータの移行

ここでは、LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、または LMS 4.0.1 からデータを移行する方法について説明します。

ここでは、リモート マシンへの [Solaris でのデータの移行](#) の手順を説明します。

この項の説明では、LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、または LMS 4.0.1 を持つマシンを「マシン A」とし、LMS 4.1 をインストールしてデータを復元する先とするリモート マシンを「マシン B」とします。



(注) LMS データをバックアップする前に、デーモン マネージャを停止することをお勧めします。

ここでは、次の内容について説明します。

- [Solaris でのデータの移行](#)
- [Windows でのデータの移行](#)
- [Soft Appliance でのデータの移行](#)

Solaris でのデータの移行

LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、または LMS 4.0.1 のデータをリモート マシンに移行するには、次の手順に従います。

-
- ステップ 1** マシン A に root としてログインします。
- ステップ 2** LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、または LMS 4.0.1 のデータをバックアップします。
CLI を使用して通常バックアップを行うには、次のコマンドを入力します。
`NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/backup.pl BKP`
BKP は、バックアップディレクトリです。
BKP の絶対パスを入力する必要があります。たとえば、*BKP* が /opt の下にある場合は、パスを `NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/backup.pl /opt/BKP` と指定します。
- ステップ 3** マシン B に root としてログインします。
- ステップ 4** LMS 4.1 をインストールします。
- ステップ 5** LMS 3.x データが圧縮ファイル (example .tar) として格納されているバックアップディレクトリ *BKP* を、マシン A から任意の一時的な場所に転送します。
- ステップ 6** 次のコマンドを入力して、デーモン マネージャを停止します。
`/etc/init.d/dmgttd stop`
- ステップ 7** 次のコマンドを入力して、バックアップしたデータを復元します。
`NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/restorebackup.pl -d BKP [-t temporary_directory]`
BKP は、バックアップディレクトリです。
BKP の絶対パスを入力する必要があります。たとえば、*BKP* が /opt の下にある場合は、パスを `NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/restorebackup.pl -d /opt/BKP` と指定します。
詳細については、[復元スクリプトの構文と使用方法](#)を参照してください。
[リモート移行する際の注意事項](#)を参照してください。
- Symantec Veritas または VMware HA 実装を使用して、LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、または LMS 4.0.1 から LMS 4.1 サーバにデータを復元することもできます。
- Symantec Veritas を使用するハイ アベイラビリティ (HA) 実装の詳細については、[Cisco Prime LMS のハイ アベイラビリティ環境およびディザスタ リカバリ環境でのセットアップ](#)を参照してください。
 - VMware を使用するハイ アベイラビリティ (HA) 実装の詳細については、[VMware を使用したハイ アベイラビリティ、ライブ マイグレーション、および Storage VMotion のための Cisco Prime LMS のセットアップ](#)を参照してください。
- ステップ 8** 次の場所にあるログ ファイルを調べて、データが復元されたことを確認します。ファイルは次のとおりです。
- /var/adm/CSCOpX/log/restorebackup.log
 - /var/adm/CSCOpX/log/migration.log
 - /var/adm/CSCOpX/log/rme_base.log



(注) migration.log と rme_base.log は、RME (以前のバージョンの LMS の一部) を移行した場合にだけ生成されます。

ステップ 9 次のコマンドを入力して、デーモン マネージャを開始します。

```
/etc/init.d/dmgttd start
```

Windows でのデータの移行

LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、および LMS 4.0.1 のデータをリモート マシンに移行するには、次の手順に従います。

ステップ 1 マシン A に管理者としてログインします。

ステップ 2 LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、または LMS 4.0.1 のデータをバックアップします。

CLI を使用してこれを行うには、次のコマンドを入力します。

```
NMSROOT\bin\perl NMSROOT\bin\backup.pl BKP
```

BKP は、バックアップ ディレクトリです。

BKP の絶対パスを入力する必要があります。たとえば、*BKP* が C:/ の下にある場合は、パスを *NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/backup.pl C:/BKP* と指定します。

ステップ 3 マシン B に管理者としてログインします。

ステップ 4 LMS 4.1 をインストールします。

ステップ 5 LMS 3.x のデータが入っているバックアップ ディレクトリ *BKP* をマシン A から任意の一時的な場所にコピーします。

ステップ 6 次のコマンドを入力して、デーモン マネージャを停止します。

```
net stop crmdmgttd
```

ステップ 7 次のコマンドを入力して、バックアップしたデータを復元します。

```
NMSROOT\bin\perl NMSROOT\bin\restorebackup.pl -d BKP [-t temporary_directory]
```

BKP は、バックアップ ディレクトリです。

BKP の絶対パスを入力する必要があります。たとえば、*BKP* が C:/ の下にある場合は、パスを *NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/restorebackup.pl -d C:/BKP* と指定します。

詳細については、[復元スクリプトの構文と使用方法](#)を参照してください。

[リモート移行する際の注意事項](#)を参照してください。

Symantec Veritas または VMware HA 実装を使用して、LMS 3.2、LMS 3.2 SP1、LMS 4.0、または LMS 4.0.1 から LMS 4.1 サーバにデータを復元することもできます。

- Symantec Veritas を使用するハイ アベイラビリティ (HA) 実装の詳細については、[Cisco Prime LMS のハイ アベイラビリティ環境およびディザスタ リカバリ環境でのセットアップ](#)を参照してください。
- VMware を使用するハイ アベイラビリティ (HA) 実装の詳細については、[VMware を使用したハイ アベイラビリティ、ライブ マイグレーション、および Storage VMotion のための Cisco Prime LMS のセットアップ](#)を参照してください。



(注)

データを非 HA 環境から HA 環境に移行するには、パスワード、HTTPS ポート、および SMTP サーバの詳細が LMS 3.2、LMS 3.2 SP、LMS 4.0、または LMS 4.0.1 サーバと Symantec Veritas を持つ LMS 4.1 サーバとで同じであることを確認します。

- ステップ 8** 次の場所にあるログ ファイルを調べて、データが復元されたことを確認します。ファイルは以下のとおりです。
- `NMSROOT¥log¥restorebackup.log`
 - `NMSROOT¥log¥migration.log`
 - `NMSROOT¥log¥rme_base.log`



(注) migration.log と rme_base.log は、RME（以前のバージョンの LMS の一部）を移行した場合にだけ生成されます。

- ステップ 9** 次のコマンドを入力して、デーモン マネージャを開始します。

```
net start crmdmgt
```

Soft Appliance でのデータの移行

Solaris から Soft Appliance にデータを移行するには、次の手順に従います。

- ステップ 1** Solaris サーバであるマシン A に root としてログインします。
- ステップ 2** データをバックアップします。
- CLI を使用して通常バックアップを行うには、次のコマンドを入力します。
- ```
NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/backup.pl BKP
```
- `BKP` は、バックアップディレクトリです。
- `BKP` の絶対パスを入力する必要があります。たとえば、`BKP` が `/opt` の下にある場合は、パスを `NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/backup.pl /opt/BKP` と指定します。
- CLI を使用して選択バックアップを実行するには、[付録 E「バックアップ スクリプトの構文と使用方法」](#) を参照してください。
- ステップ 3** Soft Appliance サーバであるマシン B に root としてログインします。
- ステップ 4** LMS 4.1 をインストールします。
- ステップ 5** LMS 3.2 SP1、LMS 4.0 または LMS 4.0.1、LMS 4.1 データが圧縮ファイル（たとえば .tar）として格納されているバックアップ ディレクトリ `BKP` を、マシン A から任意の一時的な場所に転送します。Soft Appliance への転送方法については、[Soft Appliance サーバへのファイルの転送](#) を参照してください。
- ステップ 6** 次のコマンドを入力して、デーモン マネージャを停止します。
- ```
/etc/init.d/dmgt stop
```
- ステップ 7** 次のコマンドを入力して、バックアップしたデータを復元します。
- ```
NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/restorebackup.pl -d BKP [-t temporary_directory]
```
- `BKP` は、バックアップディレクトリです。
- `BKP` の絶対パスを入力する必要があります。たとえば、`BKP` が `/opt` の下にある場合は、パスを `NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/restorebackup.pl -d /opt/BKP` と指定します。
- 詳細については、[復元スクリプトの構文と使用方法](#) を参照してください。
- [リモート移行する際の注意事項](#) を参照してください。

## ■ アップグレード後の操作に関する注意事項

- ステップ 8** 次の場所にあるログ ファイルを調べて、データが復元されたことを確認します。ファイルは次のとおりです。
- /var/adm/CSCOPx/log/restorebackup.log
  - /var/adm/CSCOPx/log/migration.log
  - /var/adm/CSCOPx/log/rme\_base.log



**(注)** migration.log と rme\_base.log は、RME（以前のバージョンの LMS の一部）を移行した場合にだけ生成されます。

- ステップ 9** 次のコマンドを入力して、デーモン マネージャを開始します。

```
/etc/init.d/dmgttd start
```

## アップグレード後の操作に関する注意事項

ここでは、次の内容について説明します。

- [LMS 4.1 でのアップグレード後の障害管理に関する注意事項](#)
- [Common Services のアップグレード後の操作に関する注意事項](#)
- [LMS 4.1 での AAA の手法](#)
- [ログイン モジュールのリセット](#)

## LMS 4.1 でのアップグレード後の障害管理に関する注意事項

ここでは、SNMP トラップの受信と転送の完全な基本設定手順を説明します。

### SNMP トラップの受信と転送の設定

LMS は、デフォルトではポート 162 で SNMP トラップを受信します（ポート 162 が使用されている場合は、ポート 9000）。ポートを変更する必要がある場合は、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Admin] > [Network] > [Notification and Action Settings] > [Fault - SNMP trap receiving settings] を選択します。
- SNMP トラップ受信の設定ページが表示されます。
- ステップ 2** [Receiving Port] 入力ボックスにポート番号を入力します。
- ステップ 3** [Apply] をクリックします。



LMS にトラップをリモート NMS へと転送させる場合は、次の手順を実行します。

- 
- ステップ 1** [Admin] > [Network] > [Notification and Action Settings] > [Fault - SNMP trap forwarding] を選択します。
- SNMP トラップ転送の設定ページが表示されます。
- ステップ 2** 各ホストの次の情報を入力します。
- ホスト名の IP アドレスまたは DNS 名
  - ホストがトラップを受信できるポートの番号
- ステップ 3** [Apply] をクリックします。
- ステップ 4** NMS がステップ 2 で指定したポートでトラップを受信するように設定されていることを確認します。
- 



(注) LMS 4.1 の障害管理機能では、HPOV または NetView アダプタはサポートされていません。

---

## Common Services のアップグレード後の操作に関する注意事項

ここでは、LMS 認証、認可、アカウントिंग (AAA) の手法について説明します。

### LMS 4.1 での AAA の手法

LMS 4.1 では、AAA モードは [CiscoWorks ローカル モード](#) の 1 つしかサポートされていません。

#### CiscoWorks ローカル モード

LMS 4.1 サーバは、CiscoWorks ローカル モードのモードで次のログイン モジュールをサポートします。

- CiscoWorks Local
- KerberosLogin
- ローカル NT システム (Windows のみ)
- ローカル Unix システム (Solaris のみ)
- MS Active Directory
- RADIUS
- TACACS+

LMS 4.1 では、ユーザを認証して、ユーザに LMS へのアクセスを許可するために、CiscoWorks サーバ認証 (CiscoWorks ローカル モード) が使用されます。

これに対し、CiscoWorks ローカル以外のログイン モジュールを選択した場合は、認証は実行できますが、認可は行われません。認可は、CiscoWorks ローカルを通じてしか行えません。

## ログイン モジュールのリセット

次のコマンドを実行すれば、ログイン モジュールを CiscoWorks ローカル モードにリセットできます。  
Solaris および Soft Appliance の場合 :

- 
- ステップ 1** 次のコマンドを入力して、LMS システムを停止します。
- ```
/etc/init.d/dmgttd stop
```
- ステップ 2** 次のスクリプトを実行します。
- ```
NMSROOT/bin/perl NMSROOT/bin/ResetLoginModule.pl
```
- ステップ 3** 次のコマンドを入力して、LMS システムを開始します。
- ```
/etc/init.d/dmgttd start
```
-

Windows の場合 :

-
- ステップ 1** 次のコマンドを入力して、LMS システムを停止します。
- ```
net stop crmdmgttd
```
- ステップ 2** 次のスクリプトを実行します。
- ```
NMSROOT\bin\perl NMSROOT\bin\ResetLoginModule.pl
```
- ステップ 3** 次のコマンドを入力して、LMS システムを開始します。
- ```
net start crmdmgttd
```
-